

連載3 「魂の鎮まる場所」

敷地の一角に「鎮魂碑」なるものがある。明星学園に在籍中にお亡くなりになった方々の魂を慰め、鎮める場所である。命日はもちろんのこと、お盆、お彼岸など花が絶え間なく供えられている。明星学園開設以来46年の間に亡くなられた34名の方の名前が刻まれていて、古くは今のようにてんかん発作を上手に抑え込めなかった時代、てんかんの重責発作（連続的に発作が生じて止まらなくなる状態、心臓にも脳にも大きな負担がかかる）で亡くなられた方、近くは定型発達の方々と同じように知的障がいの方々も寿命が伸びたこと（数十年前は知恵遅れの方は長生きができないと言われた）が大きな原因であると思われるが、悪性腫瘍や脳血管障害で亡くなられた方がいて、そしてとても残念なことであるけれど誤嚥による窒息が原因で亡くなられた方の名前もある。

時々この「鎮魂碑」の前で頭を垂れて礼拝する時、心の中で去来するのは「私たちの支援は、皆さんを幸せにするのに間に合いましたか？」という自問である。天の声が「ありがとうね、間に合ったよ」と聞こえればいいのですが、大概の答えは「あの時はあれが精一杯だったと思うから決して責めてはいませんが、みんなが幸せになるために、まだまだこれからやらなくてはならないことはいっぱいですよ」と返ってくるので、「いやー、まいったなあ…」と鎮魂碑を離れるのですが…。

それでも、背中を見せて離れていく私に「あの時は、ありがとうございました」の声をかけてくれているような気がして、いつも励まされるのである。

さて、その「鎮魂碑」、時には、こんな活用のされ方をしている。

Iさん、家族の帰省も無く、もちろん面会もない。20年以上前に、お父さま、お母さまはすでに亡くなられていて、そのご家族とは音信不通の状況である。したがってお父さまやお母さまのお墓を捜そ

うにも全く手掛かりもなく、お盆やお正月であっても墓参りさえできない状況なのである。明星学園では、どんなに障がいの重い方であっても父親が亡くなった後、母親が亡くなった後、定型発達の者と同じ心情を父や母に対して抱いていると考えているので、命日やお盆、お正月のお墓参りは欠くことができない支援となっているのだが。

そんなIさん、お盆を前にして、いつもは少ない排尿の失敗が続き、とても穏やかな性格であるはずが、頻繁に大きな声を出して怒り続けるのである。私も含めて彼の父親や母親、そして家族のことを詳しく知る職員は現在、学園にはいない。退職したベテラン職員に昔のことを尋ねても今の彼の幸せに役立ちそうな情報がない。そこで、支援者は、自棄のやん八、ダメもとで「鎮魂碑」へのお参りを父親や母親のお墓の代わりにと提案したのだった。彼の表情が変わった。さっそく花とお線香と簡単なメッセージを書いた手紙を用意して「鎮魂碑」を父や母が眠るお墓の代替物としてお参りしたのだった。

先ほどまでの彼の行動が信じられないほど、彼はいつもの穏やかな彼に戻ったのだった。父や母とつながった一瞬だった。

私たちは、いつも「つながり」の中で生きている。もちろん生きている間は、その相手と笑ったり、話したり、そばにいたりしながら、つながって生きている。しかし、それは亡くなった後も同じなのだ。お墓の前で手を合わせる、居室の仏壇の前で手を合わせて語り掛ける、生前大好きだったものを供える、花を手向ける。亡くなった方ともつながり続ける。そして、それに支えられている。それは、障がいが在ろうと無かろうと変わらない。